『オリエント』第56巻第1号抜刷
2013年9月30日発行

ヒッタイト語動詞にみられる語幹形成母音 -e/a-

吉 田 和 彦

2 0 1 3

日本オリエント学会

ヒッタイト語動詞にみられる語幹形成母音 -e/a-

The Thematic Vowel -e/a- in Hittite Verbs

吉田和彦^{*}
YOSHIDA Kazuhiko

ABSTRACT It is well known that the Anatolian languages have virtually no attestation of simple thematic verbs in **-e/o-*, but thematic verbs with a suffix are abundantly attested in Hittite and the other Anatolian languages. Five types of thematic verbs will be discussed in this paper, i.e. Hittite verbs in *-ške/a-*, Hittite verbs in *-ie/a-*, Hittite denominative verbs in *-āi/-ā-*, Hittite causatives in *-e/a-*, and Cuneiform Luvian verbs in *-i/- (i)ia-*.

According to the communis opinio, Hittite active thematic verbs in *-e/a-* reflect the Proto-Indo-European alternation of the thematic vowels **-e-* and **-o-*, i.e. 1 sg. **-o-mi*, 2 sg. **-e-si*, 3 sg. **-e-ti*, 1 pl. **-o-meni* (vel sim.), 2 pl. **-e-teni* (vel sim.), 3 pl. **-o-nti*. But there does not seem to be any compelling evidence for reconstructing the thematic vowel **-o-* in pre-Hittite or further back in Proto-Anatolian. The Hittite thematic vowel *-a-* in the active paradigm of the above five types of verbs does not go back to PIE **-o-*. It is historically derived from **-e-* by a phonological rule that changed Proto-Anatolian **e* to *a* in Hittite in post-tonic open syllables before sonorants except in the 3 pl. present *-anzi*, the *a* timbre of which is explained by a different phonological rule that changed Proto-Anatolian **en* to *an* before a dental as evidenced by Hittite *anda* ‘in(to)’ in contrast to Latin *endo* ‘id.’. Likewise, the thematic vowel *a* in Cuneiform Luvian verbs in *-i/- (i)ia-* is either a phonological outcome of original **e* or of mediopassive origin.

Complete lack of the thematic vowel **-o-* in Hittite and Cuneiform Luvian is a linguistic feature that does not receive a straightforward historical explanation by what would be reconstructed from the traditional Indo-European point of view. Whether the persistent **-e-* in the active thematic paradigm is a PIE inheritance or an Anatolian innovation is a problem which must be reserved for a separate future study.

I. はじめに

印欧祖語の動詞体系には、語幹形成母音 **-e/o-* を持たないタイプ（いわゆる athematic type）と持つタイプ（いわゆる thematic type）の2つのタイプがあった。語幹形成母音を持たないタイプは母音交替によって特徴づけられる（3 sg. **h₁és-ti* ‘is’ ~ 3 pl. **h₁s-énti* ‘they are’, 3 sg. **k_l-né-ū-ti* ‘hears’ ~ 3 pl. **k_l-n-ū-énti* ‘they hear’）。これに対して、語幹形成母音を持つタイプは語幹が一定で、語尾直前の **-e/o-* によって特徴づけられる。したがってアクセントの移動をとまわず、母音交替を示さない（3 sg. **bhér-e-ti* ‘bears’ ~ 3 pl. **bhér-o-nti* ‘they bear’）。この2つのタイプのうち語幹形成母音を持たないタイプがより古く、分派諸言語においては語幹形成母音を持つタイプが生産的に使われるようになっている。

ヒッタイト語に代表されるアナトリア諸語において、語幹形成母音 **-e/o-* が語根に直接付くタイプ⁽¹⁾

^{*} 京都大学大学院文学研究科教授

Professor of Linguistics, Graduate School of Letters, Kyoto University

(1) アナトリア語派に含まれる言語間の系統関係はおおよそ以下のように考えられている。ただし、パラ語とリュ

の動詞がほとんどないという事実はよく知られている。⁽²⁾ 分派諸言語で生産的に用いられるようになったこのタイプの動詞がほぼ欠如していることから、この点においてヒッタイト語は他の諸言語よりも古い状態を保持していると考えられる。しかしながら、接尾辞が語幹形成母音 *-e/o- で終わっていたと考えられるタイプの動詞は数多く用いられている。ヒッタイト語では印欧祖語の *o が a になるので、共時的な観点からは語幹形成母音は *-e/a- になるが、以下の節においては語幹形成母音を持つ 5 つのタイプの能動態動詞の歴史について論じる。すなわち考察の対象になるのは、-ške/a- という接尾辞を持つ動詞（第 2 節）、-ie/a- という接尾辞を持つ動詞（第 3 節）、-āi/-ā- という接尾辞を持つ動詞（第 4 節）、歴史的には使役・反復を表す接尾辞に遡る -e/a- を持つ動詞（第 5 節）、それに楔形文字ルウィ語の -i/-i)ia- という接尾辞を持つ動詞（第 6 節）である。そしてこれらの動詞の歴史言語学的分析の結果として、アナトリア祖語の能動態動詞は首尾一貫して *-e- という語幹形成母音によって特徴づけられていたことを論じたい。

II. 接尾辞 -ške/a- を持つ動詞

ヒッタイト語の -ške/a- という接尾辞は未完了相を表すのに用いられる。印欧祖語の時期において *-ske/o- は動詞現在語幹に特徴的な接尾辞であったが、アナトリア語派では現在語幹からつくられる未完了過去とアオリストが過去という単一の時制に融合したために、現在形だけでなく、過去形においても⁽³⁾みられる。以下のパラダイムに示されているのは、クルークホルスト (Kloekhorst 2008, 135-6) による古期ヒッタイト語のオリジナルの粘土板にみられる -ške/a- の分布と印欧祖語 (PIE=Proto-Indo-European)⁽⁴⁾ に推定される再建形である。

	PIE	OS		PIE	OS
pres. sg. 1	*-skó-	°š-ke-e-mi	pret. sg. 1	*-skó-	—
2	*-ské-	°š-ke-e-ši	2	*-ské-	—
3	*-ské-	°š-ke-ez-zi	3	*-ské-	°š-ke-et
pl. 1	*-skó-	°š-ke-e-ua-ni	pl. 1	*-skó-	—
2	*-ské-	°š-ket ₉ -te-ni	2	*-ské-	—
3	*-skó-	°š-kán-zi	3		°š-ke-e-er

ディア語の位置についてはなお十分明らかではない。楔形文字ルウィ語、象形文字ルウィ語およびリュキア語は、他のアナトリア諸語にみられないいくつかの重要な言語特徴を共有しているために、それらの前段階として共通ルウィ語という時期があったと考えられる。

図 1 アナトリア諸語の系統関係

(2) このタイプはヒッタイト語において完全に欠落しているとレーアマン (Lehrman 1985) は主張した。ヒッタイト語以外のアナトリア諸語については、象形文字ルウィ語の tamari (<*-a-di<*-a-ti<*-o-ti) ‘builds’ が語幹形成母音を持つタイプであるという可能性がジャザノフ (Jasanoff 2003, 227) によって指摘されている。この形式はギリシア語の δέμω ‘I build’ に対応する。

古期ヒッタイト語では、現在 3 人称複数を除いて母音 e を持つ *-ške-* がパラダイムに一貫してみられる。現在 3 人称複数では母音 a を持つ *-škanzi* が使われているが、この形式は **-ské-nti* という祖形から規則的に導くことができる。なぜなら、ラテン語 *endo* に対応するヒッタイト語 *anda* ‘in(to)’ に裏づけられるように、アナトリア祖語の **en* は歯茎音の前で *an* になるからである (cf. Melchert 1994, 134)。以上からアナトリア祖語に母音 o を持つ **-skó-* を建てる積極的な根拠はないことが分かる。それにもかかわらず、うえのパラダイムの印欧語祖形としてクルークホルストは **-ské-* と交替する **-skó-* を再建している。その理由は、1 人称単数、1 人称複数そして 3 人称複数では語幹形成母音 **o* が現れるのに対して、2 人称単数、3 人称単数そして 2 人称複数では語幹形成母音 **e* が現れるという伝統的な見方に従っているからだと考えられる。⁽⁵⁾ しかしながら、ヒッタイト語の観点からみると、語幹形成母音 **o* を持つ **-skó-* を建てる積極的な根拠は存在しない。古期ヒッタイト語にみられる *-ške-* と *-ška-* の分布については、伝統的な印欧語比較文法において考えられている再建形から自然な歴史的説明を与えることは困難である。

III. 接尾辞 *-ie/a-* を持つ動詞

印欧祖語の接尾辞 **-ie/o-* は大きく 2 つに分けることができる。ひとつは動詞語幹に付き動詞現在語幹を形成するタイプ (deverbative)、もうひとつは名詞語幹に付き動詞を派生するタイプ (denominative, 出名動詞) である。この接尾辞はヒッタイト語において *-(i)ia-* (<**-io-*), *-(i)ie-* (<**-ie-*) と一般に表記され、両者は恣意的に交替するような印象が与えられていた。またこれらの接尾辞は *-e-* または *-i-* と書かれる場合もある。ヒッタイト語粘土版を時代区分する作業がなされていなかった頃には、*-e-* (*-i-*) は *-(i)ia-* から縮約によって生まれたものと考えられていた。⁽⁶⁾ しかしながら、その後画期的な発展を遂げたヒッタイト語文献学の成果により、現在では古期ヒッタイト語の *-(i)ie-* は後期ヒッタイト語において *-(i)ia-* に取って代わられたことが明らかになっている。たとえば、つぎの古期ヒッタイトのオリジナルの粘土板に記録されている形式はすべて *-ie-* によって特徴づけられている。a-ni-e-mi ‘I make’ KBo 17.1 ii 1, a-ni-e[-nu-un] KBo 3.22 rev. 48, ḥa-ri-e-mi ‘I bury’ KBo 17.5 ii 2, ḥa-ri-e-nu-un ‘I buried’ KBo XVII 3 III 12。これに対して、後期ヒッタイト語の粘土版では a-ni-ia-zi KBo 6.26 I 13 にみられるように *-ia-* に変化している。⁽⁷⁾

ところが、古期ヒッタイト語の粘土板においても *-ia-* を持つ動詞が例外的に記録されている。それらはつぎの 3 つの動詞である (合計 5 例)。

- pé-eš-ši-ia-mi KBo 17.3 iv 18 (OS) ‘I throw’, pé-eš-ši-ia-u-e-ni KUB 35.164 obv. 6 (OS) ‘we throw’

(3) 同じことが第 3 節で扱う動詞語幹に付与される接尾辞 *-ie/a-* についてもあてはまる。印欧祖語において **-ie/o-* という接尾辞が付与されるのは現在語幹に限られていたが、アナトリア諸語では過去形にも広がっている。

(4) OS は Old Script (古期ヒッタイトのオリジナルの粘土板) の略である。

(5) この **e* と **o* の分布は、たとえばラテン語 1 sg. *senēscō* (<**-sko-*) ‘I become old’, 2 sg. *senēscis* (<**-ske-*), 3 sg. *senēscit* (<**-skē-*) にみられる。

(6) たとえば, Friedrich 1960, 27 をみられたい。

(7) 詳しくは, Carruba 1966, 79ff., Watkins 1969, 71, Oettinger 1979, 27 などを見られたい。

(8) ヒッタイト語文書の多くは、粘土板をそのまま模写したかたちで、つぎの 2 つのシリーズに刊行されている。KBo=Keilschrifttexte aus Boghazköi. Berlin および KUB=Keilschrifturkunden aus Boghazköi. Berlin。個々の形式に続いて示されている情報、たとえば a-ni-e-mi KBo 17.1 ii 1 は、KBo のシリーズの 17 巻の 1 番の写本の 2 番目のコラムの 1 行目に a-ni-e-mi という形式が記録されていることを表わす。

- $\acute{u}$ -e-mi- $\dot{a}$ -u-en KBo 22.2 obv. 14 (OS) ‘we found’
- $\dot{h}$ u-la-a-li- $\dot{a}$ -mi KBo 17.1 iii 22 (OS) ‘I entwine’, KBo 17.6 iii 14 (OS)

あとの議論と関わってくるが、うえに示した $\dot{a}$ - を持つ動詞は 1 人称単数（3 例）あるいは 1 人称複数（2 例）に限られていることは注目される。またこれらの 3 つの動詞の古期ヒッタイト語における他の例をみると、以下のようにすべて $\dot{e}$ - を持っており、また $\dot{e}$ - を持つ形式のほうが $\dot{a}$ - を持つ形式よりもはるかに多く記録されている。

- pé-eš-ši-e-mi KBo 17.1 iv 22 (OS), pé-eš-ši-ez-zi KBo 6.2 ii 35, iv 6 (OS), pé-eš-ši-i-e-ez-zi KBo 17.43 I 16 (OS), KBo 6.2 ii 57 (OS)
- $\acute{u}$ -e-mi-ez-zi KBo 4.2 iii 35, 36, 38, 58, 59, iv 11, iv 49, KBo 9.73 rev. 13, KBo 19.1 iii 49, KBo 19.2+KUB 29.16 iii 7, KUB 36.16 iii (all OS), $\acute{u}$ -e-mi-zi KBo 6.2 iv 12 (OS)
- $\dot{h}$ u-la-a-li-e-mi KBo 17.3 iv 23 (OS), [$\dot{h}$]u-la-a-li-e-z[i] KBo 25.100 Rs. 2' (OS), $\dot{h}$ u-la-a-li-ez-zi KUB 37.223. Rs. 3 (OS)

以下のパラダイムは、クルークホルスト (Kloekhorst 2008, 131) による古期ヒッタイト語のオリジナルの粘土板にみられる $\dot{e}$ -/a- の分布と印欧祖語に推定される再建形である。

	PIE	OS		PIE	OS
pres. sg. 1	* $\dot{a}$ -	- $\dot{a}$ -mi, -i-e-mi	pret. sg. 1	* $\dot{a}$ -	-i-e-nu-un
2	* $\dot{e}$ -	-i-e-ši	2	* $\dot{e}$ -	—
3	* $\dot{e}$ -	-i-e-ez-zi	3	* $\dot{e}$ -	-i-e-et
pl. 1	* $\dot{a}$ -	- $\dot{a}$ -u-e-ni	pl. 1	* $\dot{a}$ -	- $\dot{a}$ -u-en
2	* $\dot{e}$ -	—	2	* $\dot{e}$ -	—
3	* $\dot{a}$ -	- $\dot{a}$ -an-zi	3		-i-er

クルークホルストは古期ヒッタイト語に接尾辞 $\dot{a}$ - を持つ動詞が記録にあることを正しく認識している。しかしながら、第 2 節でみた -ške- ~ -ška- の場合と同様に、印欧祖語において * $\dot{e}$ - と * $\dot{a}$ - が交替するという伝統的な見方をアプリアリに受入れ、 $\dot{a}$ - が印欧祖語の * $\dot{a}$ - に遡ると考えている。彼の見方によると、古期ヒッタイト語動詞にみられる $\dot{a}$ - は祖語の特徴を継承するものであり、革新によるのではない。

しかしながら、クルークホルストによるうえの再建形についてはいくつかの問題点がすぐに浮かびあがってくる。まず 1 人称単数過去に * $\dot{a}$ - が再建されているが、古期ヒッタイト語にはそれを裏づける根拠がない。実際に記録されているのは $\dot{e}$ - を持つ $\dot{e}$ -enun である。2 番目に、クルークホルストの見方では 1 人称単数現在の -i-e-mi と 1 人称単数過去の -i-e-nu-un にみられる $\dot{e}$ - は、* $\dot{a}$ - から二次的につくられたことになる。もしこの分析が正しいならば、* $\dot{a}$ - から $\dot{e}$ - への形態変化は * $\dot{e}$ - を一般化しようとするパラダイムの画一化によるに違いない。しかしながら、このパラダイムの画一化は不完全である。なぜなら、1 人称単数現在の $\dot{a}$ -mi, 1 人称複数現在の $\dot{a}$ -u-e-ni および 1 人称複数過去の $\dot{a}$ -u-

en がこの形態変化を受けていないからである。この状況は第 2 節でみた *-ske-* を持つ動詞の場合と顕著に異なっている。そこではパラダイムを通して *-ske-* が実質的に一貫して用いられていた。パラダイムの画一化が不完全な *-je/a-* を持つ動詞と違って、*-ske/a-* を持つ動詞においてなぜ語幹形成母音 *e* が一般化されているのかという問題を説明するのは困難である。3 番目に、クルークホルストは接尾辞にアクセントの落ちるタイプ、すなわち **-jé/ó-* を持つ動詞だけを問題にしている。彼は印欧語の **-je/o-* を持つ動詞は語根にアクセントが落ちないと考えているが (Kloekhorst 2008, 180)、この立場は正しくない⁽⁹⁾。以下でみるように、語根にアクセントが落ちるタイプの分析は問題の解決に向けて重要な鍵を担っている。

-ske-* を持つ動詞と **-je-* を持つ動詞のあいだの重要な違いはアクセントの位置にある。前者はつねにアクセントが接尾辞 **-ské-* に落ちる。アクセント位置が固定していることによって、古期ヒッタイト語において *e* という母音が一貫してみられることが説明される。これに対して、-je-* を持つ動詞には 2 つのタイプがある。すなわち、アクセントが接尾辞に落ちるタイプと語根に落ちるタイプである。この 2 つのタイプの違いは決定的な重要性を持っている。うえで示した古期ヒッタイト語の動詞、*pé-eš-ši-ja-mi*, *pé-eš-ši-ja-u-e-ni*, *ú-e-mi-ja-u-en*, *hu-la-a-li-ja-mi* (2 例) にみられる *-ija-* は、「アナトリア祖語の **e* は共鳴音が後続する開音節の位置でアクセントが先行する場合、ヒッタイト語で *a* になる」という音法則によって説明できる⁽¹⁰⁾。個別的にみると、*pé-eš-ši-ja-mi* と *pé-eš-ši-ja-u-e-ni* については、動詞前接辞が一貫して *pe-* と書かれているために *pe-* にアクセントが落ちていたと考えられる。*ú-e-mi-ja-u-en* は同様に語根が *e* と書かれているために、語根にアクセントを有する **au-híem-je-u-en*⁽¹¹⁾ に遡る。最後の *hu-la-a-li-ja-mi* は *hulāli-* ‘distaff’ という名詞から派生された出名動詞であり、語根にみられる母音 *a* のダブリング (scriptio plena) は対応する名詞からの影響によって語根にアクセントを持つようになったことを示している⁽¹²⁾ (**-jé-mi* → **-je-mi*)。接尾辞 *-ija-* によって特徴づけられるこれら 5 つの形式は、より広く分布する接尾辞 *-je-* (<**-jé-*) からの二次的な形態的影響を免れた貴重な古い形式と考えることができる⁽¹³⁾。以上の分析から、接尾辞 *-ske/a-* を持つ動詞の場合と同じく、*-je/a-* を持つ動詞の場合も

(9) たとえば、**spék-je/o-* (ラテン語 *speciō* ‘I see’, ギリシア語 *σκέπτομαι*, サンスクリット語 *pásyate*) は語根にアクセントが落ちている。

(10) この音法則は「アナトリア祖語 **e* > ヒッタイト語 *a* / *ʾ* __. R」⁽¹⁰⁾と定式化することができる。これと類似した音法則はウォーレン・コウギル (Warren Cowgill) によって示唆されていた (cf. Melchert 1994, 13)。しかしながら、コウギルの音法則には「共鳴音の前で」という条件が含まれていない。この条件を付けることによって、語尾が共鳴音で始まる 1 人称単数 (-*mi*) と 1 人称複数 (-*uen(i)*) のみに *-ija-* がみられることが説明できる。ここで提案する音法則によって、古い時期のヒッタイト語にしばしばみられる能動態現在 1 人称複数語尾 *-uani* と 2 人称複数語尾 *-tani* や *u-* 語幹形容詞の斜格 (たとえば *āššauaš* (<**híes-eu-os*) ‘good’) や *i-* 語幹形容詞の斜格 (たとえば *šallaiāš* (<**sélH-ei-os*) ‘great, large’) の接尾辞に含まれる *a* という母音にも妥当な歴史的説明を施すことができる。詳しくは、Yoshida 1997 および Yoshida 2010, 391 を参照されたい。

(11) この解釈は、古期ヒッタイト語の粘土板に同じ動詞の 3 人称単数現在形として *ú-e-mi-zi* KBo 6.2 iv 12 が記録されていることから保証される。*ú-e-mi-zi* にみられるシングルの *-z-* は **-d-* が破擦化を蒙った結果であるが、この **-d-* はアクセントを有しない母音間でアナトリア祖語の時期に生じた子音の第 2 弱化規則によって **-t-* からつくられたものである。したがって、アクセントは接尾辞ではなく語根に落ちていたと考えなければならない。アナトリア祖語の子音の弱化規則については、アイヒナー (Eichner 1973, 79-82, 100⁹⁶) とモルブルゴ・デイヴィス (Morpurgo Davies 1982-83, 262) に詳しい。子音の第 1 弱化規則はアクセントを有する長母音もしくは二重母音の後で作用した。古期ヒッタイト語において母音間でシングルの *-z-* を持つ他の動詞とその歴史的解釈については、吉田 (Yoshida 1998) を参照されたい。

(12) 先の注で言及した *ú-e-mi-zi* と同じく、*[h]u-la-a-li-e-z[i]* KBo 25.100 Rs. 2’ (OS) という 3 人称単数現在形が古期ヒッタイト語の粘土板に記録されていることは注目に値する。この動詞にみられるシングルの *-z-* はアクセントが接尾辞に落ちていなかったことを裏づけている。

-ia- は音法則によって *¹-je- から導くことができ、母音 o を含む *_{io}- という接尾辞の再建を要求する積極的な根拠はない。

IV. 接尾辞 -āi/-ā- を持つ動詞

接尾辞 -āi/-ā- を持つ出名動詞はヒッタイト語で生産的に用いられている。この接尾辞は、印欧語比較文法の観点からは、作為動詞をつくる接尾辞 *-eh₂- が出名動詞をつくる接尾辞 *_{je}-o- に拡張された *-éh₂-_{je}-o- に遡ると考えられている (cf. Melchert 1984, 39f. および Melchert 1997, 133f. を参照)。この見方はつぎの 3 つの事実から支持されるように思われる。まず第一に、armahh- (<*-éh₂-_{je}-o-) ‘make pregnant, impregnate’: armā(i)- (<*-éh₂-_{je}-o-) ‘be(come) pregnant’ や kutruuāh- ‘summon as witness’: kutruuā(i)- ‘bear witness’ といったペアにみられるように、接尾辞 -āi/-ā- は -ahh- (<*-eh₂-) に直接関係づけられる。2 番目に、リュキア語や楔形文字ルウィ語からの比較言語学的な根拠は、このタイプがアナトリア祖語に存在していたことを物語っている。すなわち、リュキア語 χttadi ‘harms’ の -adi や楔形文字ルウィ語の語末要素 -āti にみられる弱化した歯茎音と a という母音は、*-éh₂-_{je}-ti を再建することによって自然に説明する事ができる (*-éh₂-_{je}-ti > *-ā_iedi > *-ā_iidi > *-ā_idi > -ādi)⁽¹⁴⁾。*-éh₂-_{je}-ti のアクセントの位置については、*-eh₂- が単独で現れるときのアクセント位置からの影響を受けたと考えられる。アクセントが語幹形成母音に置かれていなかったという見方は、うえの 3 人称単数のリュキア語 -adi や楔形文字ルウィ語 -āti だけでなく、3 人称複数のリュキア語 χttaiti の -aiti や楔形文字ルウィ語 -ainti の先史にみられる語尾 -nti 直前の語幹形成母音 e (リュキア語) と a (楔形文字ルウィ語) の脱落によっても確証される (*-éh₂-_{je}-nti > *-ā_ionti > *-ā_ienti (リュキア語) / *-ā_ianti (楔形文字ルウィ語) > -ainti)。3 番目に、パラ語 takkuuagati/takkuuāti ‘offers’ や hantanāti ‘meets with’ にみられる -ā/-aga- は *-éh₂-_{je}-o- を反映していることがあげられる。⁽¹⁵⁾

うえに示した見方に対して、エッティンガー (Oettinger 1979, 358) は -āi/-ā- を持つ動詞の祖形として以下のように *_o-_{je}-o- のタイプを再建している。⁽¹⁶⁾

(13) 接尾辞にアクセントを持つタイプは、歴史的には -ié/ó- 現在を継承する kar-pí-i-e-mi ‘take up’ や出名動詞 šī-it-ta-ri-ez-zi ‘seals’ に反映されている。アクセントが接尾辞に落ちるタイプと語根に落ちるタイプの違いは楔形文字ルウィ語においても保持されている。たとえば、ka-lu-ti-it-ti ‘makes the rounds of’ (<*-i-ti < *-ji-ti < *-jé-ti) にみられるダブルの -tt- はアクセントを有する接尾辞 *_{je}- を指し示している。これに対して、a-an-ni-ti ‘carries out’ (<*-i-di < *-ji-di < *-je-di < *-je-ti) にみられるシングル of the -t- (弱化して閉鎖時間が短くなったためにシングルで表記されている) はアクセントを持たない母音間で作用した子音の第 2 弱化規則の結果である。さらに、リュディア語の -id を持つ 3 人称単数現在形はアクセントを有さない接尾辞 *¹-jedi (<*¹-jeti < *-jéti) に遡ると考えられる (cf. Melchert 1992, 48f.)。ちなみにリュディア語はアルファベットで表記されている。

Melchert 1997, 132f. は、一部の出名動詞においてアクセントが後退した (*_{je}- ← -jé-) のは語根にアクセントがある *_{je}-o- 現在からの類推によると考えている。しかしながら、うえで論じた古期ヒッタイト語の hu-la-a-li-ia-mi に例証されるように、もとの名詞 (hulāli- ‘distaff’) からの形態的影響を無視することができない。

(14) もしも *-éh₂-_{je}-ti ではなく、*-je-ti を建てるならば、楔形文字ルウィ語における実現形は -adi ではなく、-iti になるはずである。なおリュキア語はアルファベットで記録されている。

(15) ワトキンズ (Watkins 1975, 372f.) はパラ語 takkuuagati/takkuuāti をヒッタイト語の dakkudakuuair に比定している。

(16) エッティンガーはアクセントの位置を示していない。2 人称複数については母音 o を持つ -_{jo}- が再建されているが、その理由は -āeteni, -āetani, -āeten を持つ形式が記録にないことによると考えられる。

Akt. Prs.		Akt. Prät.		
Sg. 1.	[^o āmi]	< ^o o- <u>i</u> o-mi	[^o ānun]	< ^o o- <u>i</u> o-m+m̥
2.	[^o āesi, āsi]	< ^o o- <u>i</u> e-si	[^o āes]	< ^o o- <u>i</u> e-s
3.	[^o āezzi]	< ^o o- <u>i</u> e-ti	[^o āet]	< ^o o- <u>i</u> e-t
Pl. 1.	[^o āuēni]	< ^o o- <u>i</u> o-uēne-i	[^o āuēn]	< ^o o- <u>i</u> o-uēne
2.	[^o āte/ani]	< ^o o- <u>i</u> o-th ₂ ane-i	[^o āten]	< ^o o- <u>i</u> o-tene
3.	[^o ānzi]	< ^o o- <u>i</u> o-nti	[^o āer]	< ^o (o- <u>i</u> e-eh ₁ -re)

エッティンガーが *éh₂-ie/o- を再建することに反対する理由は、*h₂i- という連続が、tāie-/tāia- ‘steal’ (<*tāiiē/a-<*(s)teh₂-ié/ó-; cf. Oettinger 1979, 395) にみられるように、*i-になると考えているからである。これに対してメルチャート (Melchert 1994, 130) は、tāie-/tāia- において i/y/ が消失していない理由を、i の直後にアクセントを有する母音が続くという特異な二音節語幹 *(s)tah₂-ié/ó- の構造に帰している。エッティンガーの *o-ie/o- という再建形について、アクセントが *o に落ちる *ó-ie/o- を建てるなら、彼の見方は決して不可能ではない。しかしながら、ワトキンス (Watkins 1975, 373) やメルチャート (Melchert 1992, 51) が主張するように、パラ語 takkuuagati ‘offers’ に含まれる -g- が *h₂i- を反映するのであれば、この見方の蓋然性は低くなる。

接尾辞 -āi-/ā- の祖形としてうゑのエッティンガーの見方に類似しているが、アクセントが -ié/ó- に落ちる再建形 *o-ié/ó- を含むパラダイムがクルークホルスト (Kloekhorst 2008, 133) によって以下の⁽¹⁷⁾ように建てられている。

	Pres.	Pret.
Sg. 1.	*-Co- <u>i</u> ó-	*-Co- <u>i</u> ó-
2.	*-Co- <u>i</u> é-	*-Co- <u>i</u> é-
3.	*-Co- <u>i</u> é-	*-Co- <u>i</u> é-
Pl. 1.	*-Co- <u>i</u> ó-	*-Co- <u>i</u> ó-
2.	*-Co- <u>i</u> é-	*-Co- <u>i</u> é-
3.	*-Co- <u>i</u> ó-	

しかしながら、*o-ié/ó- という再建形は以下の 4 つの理由で受け入れることができない。まず、ヒッタイト語 -āi- の長母音 ā をクルークホルストは *o-ié/ó- に含まれる母音間の *i の消失による代償延長によって説明しているが、これは理論的な観点から支持できない。ヘイズ (Hayes 1981) によって実証的に示されているように、代償延長が観察されるときに消失する子音は必ずコーダ (音節末) に位置している。*o-ié/ó- という連続において *i はオンセット (音節初頭) にあるが、この場合 *i が消失しても先行する母音が長くなることはない。2 番目に、アクセントが直前の母音にある場合は弱化規則が作用しないために、うゑで論じたリュキア語 -ādi と楔形文字ルウィ語 -āti にみられる弱化した歯茎音が説明できない。3 番目に、リュキア語 -ādi と楔形文字ルウィ語 -āti, -ainti を導くためには、3 人称単

(17) クルークホルストは、エッティンガーと同じく tāie-/tāia- が *éh₂-ie/o- から導かれると考えている。また、すでに述べたように、*ie/o- を持つ動詞は語根にアクセントが落ちないと彼は考えている。

数 *-o-je-ti と 3 人称複数 *-o-je-nti に含まれるアクセントを有する語幹形成母音の消失を想定しなければならないが、アクセントのある母音が消失する現象は考えにくい。4 番目に、3 人称単数 *-o-je-ti と 3 人称複数 *-o-je-nti という祖形から予想されるリュキア語の形式は母音 e を持つ -eti と -eiti になるはずであるが、実際の形式は -adi と -aiti である。⁽¹⁸⁾

エッティンガーが考えている o- 語幹が *je/o- によって拡張された *-o-je/o- を持つ出名動詞の存在は完全には否定することができない (cf. Melchert 1997, 136f.)。リュキア語には 3 人称単数過去形 tubedē ‘?’ および 3 人称単数命令形 ddezedu ‘?’ が記録されている。これらの形式にみられる語尾に含まれる弱化した d, および *o に由来する語尾直前の母音 e は、アクセントを有する *o を持つ *-o-je を再建することで説明できる。さらに、-od で終わるリュディア語の 3 人称単数現在形も同様にアナトリア祖語の *-o-je-di を指し示している。⁽¹⁹⁾ しかしながら、アナトリア祖語の時期に *-o-je/o- を持つタイプが存在していたとしても、それはヒッタイト語と楔形文字ルウィにおいて *-éh₂-je/o- と融合し、両者とも音法則によってヒッタイト語 -āi-/ā-, 楔形文字ルウィ語 3 人称単数 -āti, 3 人称複数 -ainti になる。

うえて示したエッティンガーとクルークホルストのパラダイムには、さらにもうひとつの共通点がある。それは接尾辞 *je- と *jo- にふくまれる語幹形成母音 *e/o- の分布である。彼らが考えている語幹形成母音 *e/o- の分布は、伝統的な印欧語比較言語学の視点から予想されるものと同じである。⁽²⁰⁾ しかしながら、第 2 節と第 3 節での分析から明らかになったように、前ヒッタイト語の時期に母音 *o を持つ *-sko- や *jo- を建てなければならない積極的な理由はない。この点で、-ske/a- と je-a- を持つ動詞と軌を一にして、-āi-/ā- を持つ動詞に対してもパラダイムに *je- を一貫して持つ *-éh₂-je- を建てることで整合性のうえて望ましいと考えられる。そして、以下に示すように *-éh₂-je- から音法則によって接尾辞 -āi- と -ā- の交替を説明することが可能である。

Pres.			Pret.			
Sg. 1.	-āmi	<*-ā-ja-mi	<*-éh ₂ -je-mi	-ānun	<*-ā-ja-nun	<*-éh ₂ -je-n+m̐
2.	-ā(i)ši	<*-ā-je-si	<*-éh ₂ -je-si	-āiš	<*-ā-je-s	<*-éh ₂ -je-s
3.	-āizzi	<*-ā-je-ti	<*-éh ₂ -je-ti	-āit	<*-ā-je-t	<*-éh ₂ -je-t
Pl. 1.	-āua/eni	<*-ā-ja-uani	<*-éh ₂ -je-ueni	-āuen	<*-ā-ja-uen	<*-éh ₂ -je-uen
2.	-ātta/eni	<*-ā-je-tani	<*-éh ₂ -je-teni	-āten	<*-ā-je-ten	<*-éh ₂ -je-ten
3.	-ānzi	<*-ā-ja-nti	<*-éh ₂ -je-nti	-āer	<*-ā-je-r	<*-éh ₂ -je-r

うえのパラダイムにおいて、前ヒッタイト語の 1 人称単数と複数にみられる接尾辞 *ja- については、語尾が共鳴音で始まっているために、第 3 節で古期ヒッタイト語の接尾辞 ja- に適用されたのと同じ音法則によって説明される。すなわち、「アナトリア祖語の *e は共鳴音が後続する開音節の位置でアクセントが先行する場合、ヒッタイト語で a になる」という音法則である。⁽²¹⁾ 祖形の 1 人称単数 *-éh₂-je-mi

(18) この問題については、つぎの段落の議論を参照されたい。

(19) *-o-je-di から *-o-je-di へとアクセントが移動する現象は、同じリュディア語の -id で終わる 3 人称単数現在動詞の先史にもみられる。

(20) ただし、すでに述べたようにエッティンガーは 2 人称複数の位置に *je- ではなく、*jo- を再建している。

(21) 3 人称複数にみられる *ja- については、-škanzi と -ianzi の場合と同様に、*en は歯茎音の前で *an になるという音法則によって説明される。

と1人称複数 $*\text{-}\acute{\text{e}}\text{h}_2\text{-je-}\acute{\text{u}}\text{eni}$ が h_2 の消失によってそれぞれ $*\text{-}\acute{\text{a}}\text{-je-mi}$ と $*\text{-}\acute{\text{a}}\text{-je-}\acute{\text{u}}\text{eni}$ になった後、この規則が働いた結果 $*\text{-}\acute{\text{a}}\text{-ja-mi}$ と $*\text{-}\acute{\text{a}}\text{-ja-}\acute{\text{u}}\text{ani}$ がつくられた。さらにその後母音間の $*\text{-}\acute{\text{i}}\text{-}$ の消失と母音融合によって、実際の $\text{-}\acute{\text{a}}\text{mi}$ と $\text{-}\acute{\text{a}}\text{uani}$ が導き出される。⁽²²⁾ 他方、この音法則は、語尾が共鳴音で始まらない2人称単数と3人称単数には作用せず、 $*\text{-}\acute{\text{a}}\text{-je-}$ がそのまま残った。その後、 $*\text{-}\acute{\text{a}}\text{-je-}$ はアクセントの落ちない $*\text{e}$ が $*\text{i}$ になる変化と上述した母音間の $*\text{-}\acute{\text{i}}\text{-}$ の消失によって $\text{-}\acute{\text{a}}\text{i-}$ になった。⁽²³⁾ 2人称複数については現在形 $\text{-}\acute{\text{a}}\text{ittani}$ (あるいは $\text{-}\acute{\text{a}}\text{itteni}$) および過去形 $\text{-}\acute{\text{a}}\text{itten}$ が予想される形式である。しかし実際には記録されている形式は、 $\text{-}\acute{\text{a}}\text{ttani}$ (あるいは $\text{-}\acute{\text{a}}\text{tteni}$) と $\text{-}\acute{\text{a}}\text{tten}$ である。 $\text{-}\acute{\text{a}}\text{ittani}$ ($\text{-}\acute{\text{a}}\text{itteni}$)、 $\text{-}\acute{\text{a}}\text{itten}$ ではなく、 $\text{-}\acute{\text{a}}\text{ttani}$ ($\text{-}\acute{\text{a}}\text{tteni}$)、 $\text{-}\acute{\text{a}}\text{tten}$ で現われる理由は明らかではない。いずれにせよ、古期ヒッタイト語の粘土板には2人称複数の例は記録されていない。⁽²⁴⁾

$\text{-}\acute{\text{a}}\text{i-}/\text{-}\acute{\text{a}}\text{-}$ を持つ動詞に対して母音 $*\text{e}$ を含む $*\text{-}\acute{\text{e}}\text{h}_2\text{-je-}$ をパラダイム内部に一貫して建てることの妥当性は、このタイプの動詞の定動詞以外の形式からも支持される。たとえば目的分詞 (verbal substantive) は $\text{-}\acute{\text{u}}\text{ar}$ という接尾辞を付与することによってつくられるが、 $\text{-}\acute{\text{a}}\text{i-}/\text{-}\acute{\text{a}}\text{-}$ を持つ動詞の目的分詞は $\text{-}\acute{\text{a}}\text{i}\acute{\text{u}}\text{ar}$ ではなく、つねに $\text{-}\acute{\text{a}}(\text{u})\acute{\text{u}}\text{ar}$ によって特徴づけられている。例をあげると、 $\text{h}\acute{\text{a}}\text{n}\acute{\text{d}}\text{ā}(\text{i})$ - ‘arrange’ や $\text{i}\text{r}\acute{\text{h}}\text{ā}(\text{i})$ - ‘make the rounds’ という動詞の目的分詞は $\text{h}\acute{\text{a}}\text{n}\acute{\text{d}}\text{ā}\acute{\text{u}}\text{ar}$ ($\text{h}\acute{\text{a}}\text{n}\acute{\text{d}}\text{a}\acute{\text{u}}\text{ar}$, $\text{h}\acute{\text{a}}\text{n}\acute{\text{d}}\text{a}\acute{\text{u}}\text{ar}$)、 $\text{i}\text{r}\acute{\text{h}}\text{ā}\acute{\text{u}}\text{ar}$ ($\text{i}\text{r}\acute{\text{h}}\text{a}\acute{\text{u}}\text{ar}$) である。 $\text{-}\acute{\text{a}}\text{i-}$ を持つ $\text{h}\acute{\text{a}}\text{n}\acute{\text{d}}\text{ā}\acute{\text{u}}\text{ar}$ や $\text{i}\text{r}\acute{\text{h}}\text{ā}\acute{\text{u}}\text{ar}$ といった目的分詞は一例も記録されていない。エッティンガー (Oettinger 1979, 359) は $\text{-}\acute{\text{a}}\text{i-}/\text{-}\acute{\text{a}}\text{-}$ を持つ動詞の目的分詞に $*\text{-}\text{o-}\acute{\text{i}}\text{o-}\acute{\text{u}}\text{r}$ という形式を再建している。しかしながら、この形式に含まれている $*\text{-}\acute{\text{i}}\text{o-}$ を再建するための独立した根拠は示されていない。これと対照的に、定動詞形と同様にパラダイムを通して一貫して $*\text{-}\acute{\text{e}}\text{h}_2\text{-je-}\acute{\text{u}}\text{r}$ という形式を再建するならば、 $\text{-}\acute{\text{a}}\text{uar}$ を持つ目的分詞を音法則によって自然に説明することができる。すなわち、先に示したのと同様に、 $\text{-}\acute{\text{a}}\text{uar} < * \acute{\text{a}}\text{-ja-}\acute{\text{u}}\text{ar} < * \acute{\text{a}}\text{-je-}\acute{\text{u}}\text{ar} < * \acute{\text{e}}\text{h}_2\text{-je-}\acute{\text{u}}\text{r}$ という一連の変化を考えればよい。⁽²⁵⁾ まったく並行的な歴史的な説明を $\text{-}\acute{\text{a}}(\text{u})\acute{\text{u}}\text{anzi}$ を持つ不定詞 I に対しても施すことができる。 $\text{h}\acute{\text{a}}\text{n}\acute{\text{d}}\text{ā}(\text{i})$ - と $\text{i}\text{r}\acute{\text{h}}\text{ā}(\text{i})$ - からつくられる不定詞 I はそれぞれ $\acute{\text{a}}$ (a) を持つ $\text{h}\acute{\text{a}}\text{n}\acute{\text{d}}\text{ā}\acute{\text{u}}\text{anzi}$ ($\text{h}\acute{\text{a}}\text{n}\acute{\text{d}}\text{a}\acute{\text{u}}\text{anzi}$, $\text{h}\acute{\text{a}}\text{n}\acute{\text{d}}\text{a}\acute{\text{u}}\text{anzi}$) と $\text{i}\text{r}\acute{\text{h}}\text{ā}\acute{\text{u}}\text{anzi}$ であって、 $\acute{\text{a}}\text{i}$ (ai) を持つ $\text{h}\acute{\text{a}}\text{n}\acute{\text{d}}\text{ā}\acute{\text{u}}\text{anzi}$ や $\text{i}\text{r}\acute{\text{h}}\text{ā}\acute{\text{u}}\text{anzi}$ は一例も記録に残っていない。この事実は目的分詞の場合と同様につぎの一連の変化によって説明される。 $*\text{-}\acute{\text{e}}\text{h}_2\text{-je-}\acute{\text{u}}\text{en-ti} > * \acute{\text{a}}\text{-je-}\acute{\text{u}}\text{an-ti} > * \acute{\text{a}}\text{-ja-}\acute{\text{u}}\text{an-ti} > \text{-}\acute{\text{a}}(\text{u})\acute{\text{u}}\text{anzi}$ 。

$\text{-}\acute{\text{a}}\text{i-}/\text{-}\acute{\text{a}}\text{-}$ を持つ動詞に未完了相を表す接尾辞 $\text{-}\acute{\text{s}}\text{ke}/\text{a-}$ が付与される場合、 $\text{h}\acute{\text{a}}\text{n}\acute{\text{d}}\text{ā}\acute{\text{s}}\text{isk-}$ や $\text{i}\text{r}\acute{\text{h}}\text{ā}\acute{\text{s}}\text{isk-}$ にみられるように、 $\text{-}\acute{\text{ā}}\text{sk-}$ という $\text{-}\acute{\text{ā}}$ を含む形式ではなく、 $\text{-}\acute{\text{ā}}\text{i}sk-$ という $\text{-}\acute{\text{ā}}\text{i-}$ を含む形式がつねに現れる。この現象についても、 $*\text{-}\acute{\text{e}}\text{h}_2\text{-je-}\acute{\text{s}}\text{ke-}$ という $\text{-}\acute{\text{je-}}$ を持つ再建形によってつぎのように音韻的に自然な説明が与えられる。 $*\text{-}\acute{\text{e}}\text{h}_2\text{-je-}\acute{\text{s}}\text{ke-} > * \acute{\text{a}}\text{-je-}\acute{\text{s}}\text{ke-} > * \acute{\text{ā}}\text{-j}\acute{\text{i}}\text{-}\acute{\text{s}}\text{ke-} > \text{-}\acute{\text{ā}}\text{i}sk-$ 。この場合、接尾辞 $*\text{-}\acute{\text{s}}\text{ke-}$ が共鳴音ではなく阻害

(22) 1人称複数の $\text{-}\acute{\text{u}}\text{eni}$ は、語尾にアクセントのある $*\text{-}\acute{\text{u}}\text{éni}$ ($>\text{-}\acute{\text{u}}\text{eni}$) から二次的影響を受けた形式である。

(23) 2人称単数語尾 $\text{-}\acute{\text{ā}}\text{si}$ は二次的につくられた形式である。

(24) 実際の $\text{-}\acute{\text{ā}}\text{teni}$ ($\text{-}\acute{\text{ā}}\text{tani}$) と $\text{-}\acute{\text{ā}}\text{ten}$ に対する歴史的説明として、メルチャート (Melchert 2008, 369-72) の考えを採用することができるかもしれない。彼は、アクセントを有する e が閉鎖音と h_2 の連続の前で a になる可能性を考え、この変化によってヒッタイト語 natta ‘not’ ($< * \acute{\text{n}}\acute{\text{e}}\text{-th}_2\text{oh}_1$) を導こうとした ($*\text{-th}_2\text{oh}_1$ と同じ副詞的要素はサンスクリット語の tāthā ‘thus’, kāthā ‘how’ などにみられる)。この考えにしたがえば、 $\text{-}\acute{\text{ā}}\text{teni}$ ($\text{-}\acute{\text{ā}}\text{tani}$) と $\text{-}\acute{\text{ā}}\text{ten}$ は $*\text{-}\acute{\text{e}}\text{h}_2\text{-jé-th}_2\text{en-i}$ あるいは $*\text{-}\text{o-jé-th}_2\text{en-i}$ を建てることによって説明することができる。しかしながら、うえで述べたようにアクセントが $*\text{-jé-}$ に落ちる再建形は妥当ではない。メルチャート教授のこの考えを筆者に指摘して下さったマールブルク大学のエリザベート・リーケン (Elisabeth Rieken) 教授には謝意を表したい。なお2011年9月にワルシャワ大学で開催された第8回国際ヒッタイト学会議のうちにメルチャート教授に直接うかがったところ、彼自身みずからの考えを確信しているわけではないとのことであった。

(25) $\text{-}\acute{\text{u}}\text{ar}$ という接尾辞が、つぎに述べる不定詞 I の接尾辞 $\text{-}\acute{\text{u}}\text{anzi}$ と同様、共鳴音で始まっているという事実を見逃してはならない。この条件により、「アナトリア祖語の $*\text{e}$ は共鳴音が後続する開音節の位置でアクセントが先行する場合、ヒッタイト語で a になる」という音法則が適用されるための構造記述が満たされる。

音で始まっているために先行する **-je-* が **-ja-* にならないので、*-āšk-* ではなく *-āišk-* という形式が導かれる。⁽²⁶⁾

以上の本節の議論の結果、*-āi/-ā-* を持つ動詞についても **o* に由来する語幹形成母音を示す明確な例がないことが分かった。

V. 接尾辞 *-e/a-* を持つ動詞

本稿の最初で、ヒッタイト語に代表されるアナトリア諸語において語幹形成母音 **-e/o-* が語根に直接付くタイプの動詞がほとんどないと述べた。今から45年ほど前に、ホフマン (Hoffmann 1968) はヒッタイト語の *lukke-/lukka-* ‘set on fire’ という動詞がこのタイプに属すると考え、能動態 3 人称単数 **léuk-e-ti* と 3 人称複数 **léuk-o-nti* という祖形から導こうとした。しかしながら、この祖形を建てる根拠は乏しい。ホフマンが考えた根拠は、サンスクリット語の中・受動態 *rócate* ‘shines’ から推定されるが、実際には記録にない能動態 **rócati* である。実際に記録されているインド・イラン語派にみられる能動態は、使役・反復を表す接尾辞 **-éje/o-* を持つサンスクリット語 *rocáyati* ‘causes to shine’ とアヴェスタ *raocaiieiti* である。したがって、ワトキンズ (Watkins 1973, 69) が提案したように、ヒッタイト語の *lukkezzi*, *lukkanzi* は使役・反復を表す **louk-éje-ti*, **louk-éjo-nti* に由来を求めなければならない。この再建形は、インド・イラン語派以外ではラテン語 *lūcēre* ‘to kindle’ (<**louk-éje-si*) にも反映されている。

印欧祖語の使役・反復を表す接尾辞 **-éje/o-* を持つと考えられるもうひとつのヒッタイト語の例は、*uašše/a-* ‘clothe’ という動詞である。*uaššezzi*, *uaššanzi* はそれぞれ **uos-éje-ti*, **uos-éjo-nti* に遡り、アイヒナー (Eichner 1969, 31ff.) が指摘したようにサンスクリット語 *vāsáyati*, ゴート語 *wasjīb*, アルバニア語 *vesh* に対応する。*uašše/a-* について、エッティンガー (Oettinger 1979, 271ff., 304ff.) は最初には **-e/o-* を持つ形式に遡るとするホフマンの見方を受け入れていたが、後に使役・反復を表す **-éje/o-* を持つ形式に由来するという見方を取るようになった (cf. Oettinger 2002, ⁽²⁷⁾XX)。

lukke-/lukka- や *uašše/a-* という動詞にみられる、語幹末の *e* と *a* の交替 (3 人称単数 *uašše-zzi*, 1 人称複数 *uašša-ūeni*) については、この場合も「アナトリア祖語の **e* は共鳴音が後続する開音節の位置でアクセントが先行する場合、ヒッタイト語で *a* になる」という音法則によって歴史的に説明することができる。この音法則は、語尾が阻害音で始まっているために、3 人称単数の *-ezzi* には適用されなかった。*-ezzi* は母音間で **i* が消失した後、母音融合によってつくられた (*uaššeuzzi* < **-ée-ti* < **-éje-ti*)。他方、母音 *a* を持つ 1 人称複数の *-aūeni* については、語尾が共鳴音で始まっているためにうえの音法

(26) *-āišk-* という形式について、エッティンガー (Oettinger 1979, 360) は **-o-je-ske-* を再建している。彼の見方によれば、この **-o-je-ske-* はヒッタイト語で *-aeške-* になる。また彼は *-āišk-* という連続に含まれている *iš* を表す文字を [es] と読んでいる。しかしながら、*iš* という文字とは別に *eš* を表す別個の文字が存在している。筆者の解釈では、*iš* という文字は [is] を表しており、アクセントの後にある閉音節の **e* はヒッタイト語で *i* になるという音法則によって *i* が説明できる (cf. Melchert 1994, 139)。*hantešk-* や *irhešk-* に代表される *-ešk-* という連続を持つ後のヒッタイト語の形式に関しては、メルチャート (Melchert 1994, 177) は多音節語幹のためアクセントが初頭に移ったために *-āi-* が *-e-* になったと考えている。

(27) エッティンガー (Oettinger 1992, 220) は *lukkēzzi* と *uaššēzzi* が接尾辞 **-éje-* (> **-é-*) を含むのであるなら、接尾辞の位置に長母音 *-ē-* を表す母音のダブリング (scriptio plena) がみられるはずなのに、それがまったく欠落していることを懸念しているように思える。しかしながら、これは以下の理由で重大な問題とは言えない。まずひとつには、母音のダブリングは義務的ではないことがあげられる。つぎに非常に生産的に使用されている *-ške/a-* や *-je/a-* という接尾辞を持つ動詞からの影響で *ē : a* というパターンが容易に一般化されることが考えられる (cf. Melchert 1984, 34)。

則が適用された (uašša_ueni < *éa-_ueni < *éja-_ueni < *éje-_ueni)。*éja > *éa > a という変化については、母音間で *i が脱落した後、*a の前で *e が消失したと考えられる。⁽²⁸⁾

第2節から第4節にかけて分析した3つのタイプの動詞と同様に、接尾辞 -e/a- を持つ動詞の祖形にも母音 *o を有する *-éjo- を建てる実質的な根拠は見出せない。

VI. 楔形文字ルウィ語の接尾辞 -i-/(i)ja- を持つ動詞

楔形文字ルウィ語には、接尾辞 -i-/(i)ja- を持つ動詞が数多く記録されている。ヒッタイトの場合と事情が異なり、この接尾辞 -i-/(i)ja- のなかには *-je-/*jo- に遡ると考えられるものもあるが、-i- と -(i)ja- は独自の分布を示している。-(i)ja- (< *-jo-) を持つ動詞は -i- (< *-je-) を持つ動詞に比べると、はるかに少ない。⁽²⁹⁾ -(i)ja- を持つ形式が少ないことは、特に現在時制において顕著である。現在時制では -(i)ja- を持つ形式はつぎの3例にすぎない。能動態1人称単数 ši-_u-ri-ja-wi ‘?’, 3人称複数 [am]-ma-aš-ši-ja-an-ti ‘they wipe’, hi-iš-_u-ja-an-ti ‘they bind’。しかしながら、これらの3つの形式が歴史的に *-jo- を継承しているという保証はない。3人称複数にみられる -janti は音法則によって *-jenti から導くことが可能であるからである。⁽³⁰⁾ 1人称単数 ši-_u-ri-ja-_ui については、これ以外に -i- を持つヴァリエント ši-_u-ri-_ui も記録されている。⁽³¹⁾ 頻度のうえでは、前者の -(i)ja- を持つタイプよりも後者の -i- をもつタイプのほうが多く、他につぎの3例がみられる。ha-pí-_u-i ‘I bind’, ku-la-ni-_ui ‘I bring to an end’, ma-li-_ui ‘I suppose’。したがって、ši-_u-ri-ja-_ui にみられる -ija- は二次的にもたらされた特徴であり、対応する1人称単数過去形にみられる -jahha (cf. ta-hu-ši-ja-ah-ha ‘I kept silent’) からの形態的影響によるものと考えられる。

過去時制においても -i- を持つ動詞が大勢を占めるが、-(i)ja- を持つ動詞もいくつかある。しかしながら、hu-u-hu-i-ja-an-da ‘they ran’ などの3人称複数形にみられる -(i)janda は、うへの段落でみた現在形語尾 -janti が *-jenti から導かれるのと同様に、*-je- を持つ *-jento から音法則によって導くことが可能である。ta-hu-ši-ja-ah-ha によって代表される1人称単数過去形も -(i)ja- を持つ -jahha という連続を示している。この -jahha は *e を *a に変える機能を持つ *h₂ が母音間にあったことを示しているため、*-je-h₂e に遡ると考えることが可能である。したがって、過去時制においても1人称複数と1人称単数にみられる -(i)ja- が歴史的に *-jo- を反映していることを示す積極的な根拠はない。

これに対して、過去時制の3人称単数形については -i- を持つ動詞がやはり圧倒的に多いが、-(i)ja- を持つ形式も ti-_u-ta-ni-ja-at-ta ‘swore’, hi-i-ru-ta-ni-ja-at-ta ‘cursed’, har-ra-_u-i-ja-ta ‘?’, hu-u-i-ja-ad-da ‘ran’ という4例が記録されている。これらの4例が示している -(i)ja- が二次的につくられたのではなく、母音 *o を持つ *-jo- に直接遡ることについては疑う余地がないように思える。3人称単数過去にみられる -(i)ja- が3人称複数過去 -(i)janta からの類推によるとは考えられない。その理由は2つある。

(28) Cf. Melchert 1984, 32 および Melchert 1994, 176。同様の母音の消失は、*pé+ai->pai- ‘give’ などに観察される。

(29) モルブルゴ・デイヴィス (Morpurgo Davies 1982-3, 267) は、楔形文字ルウィ語において *-je/o- によって特徴づけられる動詞は *-je- を一般化する傾向にあると述べている。-i- を持つ動詞が -(i)ja- を持つ動詞よりも圧倒的に多いという事実は疑う余地はない。ただ彼女も本来 *-je- と *-jo- が交替していたと暗黙のうちにみなしているが、これは本節で検証しようとする問題である。ちなみに、第3節で述べたように、ヒッタイト語においては *-je- と *-jo- が歴史的に交替していたことを示す合理的な理由はない。

(30) これについては、すでに第2節で述べた。

(31) ši-_u-ri-_ui の書き出しに付けられている2本の楔は Glossenkeil と呼ばれ、それに続く語がヒッタイト語粘土板文書に混在している外国語であることを示す。

まずひとつは現在形において3人称複数から3人称単数への類推が観察されないことがあげられる。3人称単数現在形は一貫して *-i* を持っており、3人称複数現在形 *-(i)janti* に含まれている *-(i)ja-* の影響を受けていない。2番目の理由としては1番目の理由と関連するが、現在時制においても過去時制においても、類推が実際には3人称単数から3人称複数へ働いていることがあげられる。3人称複数現在では一般に *-(i)janti* を示しているが、*-inti* を示す少数の例がある (**pa-ar-ri-en-ti* ‘they smite’, **tar-ši-en-ti* ‘they vomit’, *ti-ua-da-ni-in-ti* ‘they swear’, *zu-zu-n[i-i]n-ti* ‘?’)。同様に3人称複数過去にも *-(i)ja-* ではなく *-i* を持つ例がある (*a-(a-)ri-in-ta* ‘they raised’, *la-ap-pí-in-ta* ‘?’, *ma-a-u-ua-ni-in-ta* ‘they hitched as a four span’, *ta-aš-ta-ri-in-ta* ‘?’, *t[u]-u-ma-an-ti-in-ta* ‘they heard’)。これらの例にみられる *-i* は3人称単数から拵がったものに違いない。⁽³²⁾

さらに、うえの4例のうちの *ti-ua-ta-ni-ia-at-ta* に関しては、きわめて興味深い事実が見出せる。それは、3人称単数過去形のヴァリエントとして *ti-ua-ta-ni-it-ta* という形式が記録されていることである。この形式は3人称単数現在形 *ti-ua-da-ni-it-ti* と同じく、*-i* (*<*iē-*) を示している。パラダイムの同一位置には通常同じ母音を持つ接尾辞が規則的に現れるために、*-i* と *-(i)ja-* を持つ2つのヴァリエントが3人称単数の位置においてみられることは不可解である。以下においては、3人称単数にみられる接尾辞 *-i* と *-(i)ja-* の歴史的関係について考察を行なう。

楔形文字ルウィ語の3人称単数過去語尾は、子音語幹動詞であれ母音語幹動詞であれ、つねに *-ta* という文字で表記される (cf. *a-aš-ta* ‘was’, *a-ú-i-ta* ‘came’)。他方、ヒッタイト語では子音語幹動詞には *-ta* が使われるのに対して、母音語幹動詞では *-Vt* という文字が用いられる (cf. *e-eš-ta* ‘was’, *ú-it* ‘came’)。この事実から、楔形文字ルウィ語3人称単数過去語尾 *-ta* に含まれる末尾の *a* は実際に読まれていたことが分かる。⁽³³⁾ 筆者が以前に論じたように (Yoshida 1993), ルウィ系諸言語の動詞過去形には共時的な観点から確実に中・受動態と認定できる動詞がない。過去時制における能動態と中・受動態のあいだの対立の欠如は、つぎのように考えればもっとも無理なく理解することができる。共通ルウィ語の時期に語末の歯茎音が脱落したことはよく知られている。⁽³⁴⁾ この変化が3人称単数能動態過去語尾にも作用した結果、語尾が失われ (**-Ø<*d<*t*)、⁽³⁵⁾ 3人称単数能動態過去形はその位置づけが不明瞭になった。この機能的な不透明性を取り除くために、対応する3人称単数中・受動態語尾 **-to* が能動態動詞にも広がり、3人称単数過去形を示す一般的な語尾として用いられるようになった。楔形文字ルウィ語の3人称単数過去形がつねに *-ta* によって特徴づけられていることは (うえで示した *a-aš-ta*, *a-ú-i-ta* を参照), 以上のような先史を考えることによって説明することができる。

接尾辞 *-i* / *-(i)ja-* を持つ動詞については、うえでみた形態変化と類似しているが、若干異なるプロセスを経て成立したと考えられる。ここで分析の鍵となるのは、すでに指摘した *ti-ua-ta-ni-ia-at-ta* (*<*iō-*) と *ti-ua-ta-ni-it-ta* (*<*iē-*) という3人称単数過去形の2つのヴァリエントの存在である。また

(32) これと並行的な類推作用はヒッタイト語にもみられる。*i-en-zi* ‘they do’ KBo 6.3 ii.17 という3人称複数現在形が音韻的に規則的な (*i*)-*ja-an-zi* とは別に記録されているが、そこにみられる *-iē-* は3人称単数の *i-e(z)-zi* からの類推の結果と考えられる。

(33) 楔形文字ルウィ語 *-ta* はリュキア語 *-te/-tē* に対応する。印欧祖語の **o* はヒッタイト語と楔形文字ルウィ語では *a* になるが、リュキア語では *e* で現われるために、これらの語尾は印欧祖語の **-to* に遡る。

(34) たとえば楔形文字ルウィ語 *malli* ‘mead’ (*<*mallit*) に対するヒッタイト語 *melit* をみられたい。

(35) アナトリア祖語の時期に語末の閉鎖音は弱化した。たとえば、ヒッタイト語の *pait-aš* ‘went he’ にみられるように、クリティック (*-aš*) が付いた定動詞形 (*pait*) において語尾 *-t* が母音間でシングルで書かれていることに注意されたい。

ナトリア祖語の時期に、語幹形成母音 **-o-* を再建する実質的な根拠が見出せないことが分かった。ヒッタイト語の能動態動詞のパラダイムに共時的にみられる語幹形成母音 *-a-* は印欧祖語の **-o-* には由来しない。この *-a-* は多くの場合、「アナトリア祖語の **e* は共鳴音が後続する開音節の位置でアクセントが先行する場合、ヒッタイト語で *a* になる」という音法則によって歴史的に説明することができる。また楔形文字ルウィ語の 3 人称単数過去形にみられる *-(i)ia-* については、母音 **o* を含む **-io-* に由来すると考えられるが、この **-io-* は能動態ではなく、中・受動態の特徴を継承している。以上の分析によって、アナトリア祖語の能動態動詞パラダイムにふくまれる語幹形成母音については、**-e-* が一貫して再建されなければいけないことを主張したい。ここで引き出された知見は、語幹形成母音 **-e/o-* はパラダイム内部で交替するという伝統的な印欧語比較文法においてとられている見方と根本的に相容れない。アナトリア祖語に一貫して再建される **-e-* がアナトリア語派が分岐する以前の印欧祖語の状態を保持している特徴なのか、それともアナトリア語派内部での革新的特徴なのかは、今後検証していかなければならない重要な課題である。⁽³⁸⁾

* 本稿の一部は、The 30th East Coast Indo-European Conference（ハーヴァード大学、2011年6月）および Friedrich-Alexander-Universität Erlangen-Nürnberg（2013年3月）において行った発表に基づく。これらの機会において有益なご意見をくださったジェイ・ジャザノフ教授、クレイグ・メルチャート教授、ノルベルト・エッティンガー教授、エリザベート・リーケン教授に感謝申し上げたい。また、『オリエント』編集委員会の匿名レフリーの方々からいただいたコメントも最終原稿を作成するうえで役立った。あつくお礼申し上げる次第である。

参照文献

- Carruba, O. 1966: “Die Verbalendungen auf *-wani* und *-tani* und das relative Alter der heth. Texte,” *Die Sprache* 12, 79–89.
- Eichner, H. 1969: “Hethitisch *uešš-/uaššija-* ‘(Gewänder) tragen; anziehen; bekleiden’,” *Münchener Studien zur Sprach-*

(38) この問題に関して、吉田 (Yoshida 2009) ではアナトリア祖語のほうが古い状態を保持しており、語幹形成母音 **-e-* と **-o-* の交替は、他の印欧諸語が後に獲得した特徴であることを提案した。しかしながら、そこでの結論は決定的なものではなく、考え直さなければいけない点が残っている。

印欧諸語がどのようなプロセスを経て分岐したかという問題について近年有力になっているモデルは、以下の図で示される。祖語からアナトリア語派がまず離脱し、それに続いてトカラ語、さらにケルト語派、イタリック語派が離脱したが、中央に残った諸言語はなおひとつの言語共同体としてまとまっていたと想定することができる。その理由は、残りのインド・イラン語派、ギリシア語、バルト語派、スラブ語派、ゲルマン語派、アルメニア語、アルバニア語には、複数の二次的な言語特徴が部分的に重なり合うかたちで残されているからである。この状況は、これらの諸言語がまだひとつまとまりであった時期に、複数の革新的な変化が複数の地点で起こり、これらの変化が及ぶ地域と及ばない地域があったと考えないかぎり、容易に理解できない。そしてこれらの変化が生じた後に、それぞれの語派の話し手は違った方向に移動していったと考えられる。このモデルにうえの提案を位置づけてみるならば、語幹形成母音 **-e-* と **-o-* の交替はアナトリア語派が離脱した後に他の印欧諸語がまだひとつまとまりであった時期につくられたことになる。

図2 印欧諸語の分岐モデル

- wissenschaft 27, 5–45.
- Eichner, H. 1973: “Die Etymologie von heth. *mēhur*,” *Münchener Studien zur Sprachwissenschaft* 31, 53–107.
- Friedrich, J. 1960: *Hethitisches Elementarbuch* I, Heidelberg: Carl Winter.
- Hayes, B. 1981: “Compensatory lengthening in moraic phonology,” *Linguistic Inquiry* 20, 253–306.
- Hoffmann, K. 1968: “Hethitische *luk(k)*-, *lukki*-,” *Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung* 82, 214–220.
- Jasanoff, J. H. 2003: *Hittite and the Indo-European Verb*, Oxford: Oxford University Press.
- Kloekhorst, A. 2008: *Etymological Dictionary of the Hittite Inherited Lexicon*, Leiden: Brill.
- Lehrman, A. 1985: “Simple Thematic Imperfectives in Anatolian and Indo-European,” Ph.D. Dissertation, Yale University.
- Melchert, H. C. 1984: *Studies in Hittite Historical Phonology*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- Melchert, H. C. 1992: “The third person present in Lydian,” *Indogermanische Forschungen* 97, 31–54.
- Melchert, H. C. 1994: *Anatolian Historical Phonology*, Amsterdam: Rodopi.
- Melchert, H. C. 1997: “Denominative Verbs in Anatolian,” in D. Disterheft et al. (eds.), *Studies in Honor of Jaan Puhvel: Part I, Ancient Languages and Philology*, Washington, D.C.: Institute for the Study of Man, 131–138.
- Melchert, H. C. 2008: “Problems in Hittite pronominal inflection,” in A. Lubotsky et al. (eds.), *Evidence and Counter-Evidence: Essays in Honour of Frederik Kortlandt. Volume 1: Balto-Slavic and Indo-European Linguistics, Studies in Slavic and General Linguistics*, 32, Amsterdam/Atlanta: Rodopi, 367–375.
- Morpurgo Davies, A. 1982–83: “Dentals, Rhotacism and Verbal Endings in the Luwian languages,” *Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung* 96, 245–270.
- Neu, E. 1968: *Interpretation der hethitischen mediopassiven Verbalformen*, Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Oettinger, N. 1979: *Die Stammbildung des Hethitischen Verbums*, Nürnberg: Hans Carl.
- Oettinger, N. 1992: “Die hethitischen Verbalstämme,” In O. Carruba (ed.), *Per una Grammatica Ittita*, Pavia: Gianni Iuculano Editore, 213–252.
- Oettinger, N. 2002: *Die Stammbildung des hethitischen Verbums, Nachdruck mit einer kurzen Revision der hethitischen Verbalklassen, Dresdner Beiträge zur Hethitologie*, 7, Dresden: Verlag der TU Dresden.
- Watkins, C. 1969: *Indogermanische Grammatik* III/1. *Geschichte der Indogermanischen Verbalflexion*, Heidelberg: Carl Winter.
- Watkins, C. 1973: “Hittite and Indo-European studies: The denominative statives in *-ē*,” *Transactions of the Philological Society* 1971, 51–93.
- Watkins, C. 1975: “Die Vertretung der Laryngale in gewissen morphologischen Kategorien in den indogermanischen Sprachen Anatoliens,” in H. Rix (ed.), *Flexion und Wortbildung. Akten der V. Fachtagung der Indogermanischen Gesellschaft, Regensburg, 9–14. September 1973*, Wiesbaden: Reichert, 358–378.
- Yoshida, K. 1990: *The Hittite Mediopassive Endings in -ri*, Berlin: de Gruyter.
- Yoshida, K. 1993: “Notes on the prehistory of preterite verbal endings in Anatolian,” *Historische Sprachforschung* 106, 26–35.
- Yoshida, K. 1997: “A Further remark on the Hittite verbal endings 1 pl. *-wani* and 2 pl. *-tani*,” in D. Q. Adams (ed.), *Festschrift for Eric P. Hamp, Volume II, The Journal of Indo-European Studies Monograph*, No. 25, Washington D.C.: Institute for the Study of Man, 187–194.
- Yoshida, K. 1998: “Hittite Verbs in *-Vzi*,” in S. Alp & A. Süel (eds.), *III. Uluslararası Hititoloji Kongresi Bildirileri, Çorum 16–22 Eylül 1996*, Ankara: Grafik, Teknik Hazırlık Uyum Ajansı, 605–614.
- Yoshida, K. 2009: “On the origin of thematic vowels in Indo-European verbs,” in K. Yoshida & B. Vine (eds.), *East and West: Papers in Indo-European Studies*, Bremen: Hempen, 265–280.
- Yoshida, K. 2010: “Observations on the prehistory of Hittite *ie/a*-verbs,” in R. Kim et al. (eds.), *Ex Anatolia Lux. Anatolian and Indo-European Studies in Honor of H. Craig Melchert on the Occasion of his Sixty-fifth Birthday*, Ann Arbor: Beech Stave Press, 385–393.
- Yoshida, K. 2012: “Notes on Cuneiform Luvian verbs in **-ye/o-*,” in H. C. Melchert (ed.), *The Indo-European Verb. Proceedings of the Conference of the Society for Indo-European Studies, Los Angeles 13–15 September 2010*, Wiesbaden: Reichert, 343–351.